

① 貧困の定義について

貧困は大別して「絶対的貧困」と「相対的貧困」に分類される。絶対的貧困とは人間が生きるために最低限必要な生活費に注目した定義であり、「相対的貧困」とは一般家計所得の一定割合以下（大体50%）の所得しかない世帯に注目した定義である。日本の生活保護は、絶対的貧困を保護の基準としている。またパリースがBIの支給をまず求めるのは、この絶対的貧困の解消が自由な社会の構築に不可欠だとの認識からである。

② 生活の質について

貧困は主として身体的なニーズのみを対象として議論されるが、生活に必要な質までは議論されない。そこで「相対的剥奪」や「社会的排除」といった概念が登場した（下図参照）。人間の生活は所得という単一の指標だけでは測れない。これらの概念は人間の生活を総合的に勘案し、どれだけ人間らしい生活に接する機会から排除されているかを論点とする。貧困問題に関してこのような議論がされていることは、パリースが目指す実質的自由の重要な要素である機会の均等とも整合性がある。

表 8-1 社会的排除と絶対的貧困、相対的剥奪との違い

	絶対的貧困	相対的剥奪	社会的排除
次元	一次元	多次元	多次元
必要財・サービス	身体的ニーズ	身体的ニーズ 物質的ニーズ	身体的ニーズ 物質的ニーズ 社会参加
分配と他人の関係	分配に配慮	分配に配慮	分配に配慮 他人との関係
時間の長さ	一時的	一時的	長期的
対象の人	個人 家計	個人 家計	個人 家計 コミュニティ

(資料)『日本の貧困研究』283頁より

③ 共同体について

アメリカや日本と言った独立の精神が強い国は、社会保障が弱く貧困率が高い。政府への信頼が低く、努力した個人が報われる私益優先思想に共鳴する人が多いのである。個人の私益はある程度認められるが、それに基づく社会は大きな危険をはらむ。まず「バレなければ良い」との発想を持つ人々が増え、犯罪も増える。その結果人々は疑心暗鬼に陥り、公共の利益を考えられなくなる。それは共同体の解体を意味する。大災害後の略奪は好例である。このような社会は貧困問題などの公共の話題は軽視され、代わりに暴力的な性質を持つに至る。私益の優先には『リヴァイアサン』の世界が潜んでいる。